

Title	ルソーの自然概念に就て
Sub Title	A Study of the Meaning of "Nature" in the Emile of J. J. Rousseau
Author	村井, 實(Murai, Minoru)
Publisher	三田哲學會
Publication year	1951
Jtitle	哲學 No.27 (1951. 8) ,p.193- 204
JaLC DOI	
Abstract	What did Rousseau mean by "nature"? This is really one of such a kind of problem which is always both old and new. It is old because it seems to have been thoroughly disputed by many scholars of various branches of philosophical study. And yet, it remains new for us in the fact that Rousseau's "nature" cannot but be remembered and studied whenever the historical crises, political or educational, threaten us. Especially, among the pedagogues of Japan's Rousseau's "nature" has become something like an idol, and amid the educational chaos of present day Japan they are again hoisting it as a banner of their educational ideal. There are some dangers, however, in this passionate movement Some people identify it with a principle of "laissez-faire" and some understand it as a kind of barbarism and others keep it just like sentimental idol-worshippers do. All these erroneous understandings and movements result,from the ambiguity of the conception of "nature." They tried to explain it by making a classified table of its various meanings used in the Rousseau's works, or they thought it possible to throw light upon it by studying Rousseau's life or character more in details. But those strivings were all in vain. They could give us .nothing more than some perplexing informations about its ambiguity and complexity, and yet its true significance remains unknown. Isn't there any real understanding of "nature" which is one and may be the sole ground of our edtical activity? Did Rousseau inform us the one and true meaning of "nature" from the educational viewpoint? If not, why did he not or could he not describe it in a one and simple way so that he may not perplex his followers? We must find this reason, and if we can, we should lead to the ultimate understanding, of Rousseau's "nature," and accordingly to the true conception of the educational "nature." This report is a study to this purpose, that is to say, we tried to explain Rousseau's "nature," not by, as it were, a classifying metod but by faithfully following Rousseau's method of thinking.
Notes	
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00150430-00000027-0193

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

ルソーの自然概念に就て

村 井 實

(1)

ルソーはその著作の到る所に於て自然(*la nature*)という概念を基調として我々に呼びかけている。しかもその自然の概念は、ルソー自身が明瞭に言つてゐるように、必ずしも一定の内容を賦与された一義的な概念として理會することは出来ない。寧ろその使用される個々の事例に就て文脈に応じて知らるべき極めて柔軟性に富む概念であつたと言ふべきであらう。

ルソーの自然概念に関するこのような事情は、此の概念を理會しようとする我々の試みに対して或る種の方法上の制約を余儀なくせしめる。それはつまりルソーの使用した自然概念の変化に富む個々の事例を記述的分類的に処理することを不可能ならしめるという一つの制約である。古来多くの研究家達が鋭意解かんとして解き得ず遂に不可解以外の何物もないと歎ぜざるを得なかつたのも此処に原因することが多い。併し一般に一つの方法を困難ならしめる制約は逆に我々をして他の方法の試みに駆り立てる有利な条件ともなる。然も我々は未だ不可能を言うことを好まない

のである。

それでは改めて試むべき別個の方法とは一体何であろうか。それを知ることが先ず我々にとって必要な予備的条件であり、かくて知られた方法に従つてルソーの自然觀を明瞭ならしめることが与えられた本来の課題である。

先ず記述的分類的方法のルソーに於て不可能な所以に就て考えて見よう。自然に就て記述することは、ルソーの著作の中から自然という主語に就て幾種類かの述語を見出すことであり、自然に就て分類することは見出された述語に従つてそれを予め考えられた幾つかの項の中にはめ込むことを意味する。然るにルソーの場合のようにルソー自身によつて明確な述語が与えられず、その使用する意味が複雑である場合には、我々自身がその内容に従つて適當な述語を作り出すことが必要である。自然概念の複雑な内容を一定数の述語の中に統一しようとする此の強引な試みが、更に此の述語の幾つかに対して一定の分類項を作る試みと相俟つて、此處に方法的な誤謬の二重の危険性が生ずる。而して此の二重の危険性におびやかされてルソー自身の自然概念が、正直な操作にとつては一個の複雑な謎となり、逆に、ルソーの所謂「己が威嚴の爲に人を欺くことをはばからぬ」不敵な操作の前には恐るべき独断の犠牲となつて分類項の行間に行方をくりますのである。然るにルソーの場合には此の危険を更に大きなものとなす個性的な条件が加はつて来る。それはルソーの天才である。

ルソーの教育論がロックから多くのものを借り来り、彼の思想が啓蒙主義の余波の上に浮んでいることを指摘するのは恐らく容易な業であらう。しかもなほ我々はルソーが依然として独自の思索家であり、彼自身の言葉を借りれば「眞理に対する愛を唯一の哲学として」彼自身の世界觀への道を歩いたことを認めざるを得ない。「懺悔録」や「孤独な散歩者の夢想」に窺はれるルソーの面影は事實読書家たり、学者たり、文人たるよりも寧ろ先ず思索家と呼ばれな

ければならない特異なタイプに属している。此の点彼はロックにも似ていなかったし啓蒙主義者の誰にも似ていなかった。いはば唯彼自身にのみ似ていたと言うべきであろう。しかも此の特異なタイプに加うるに、その新鮮な夢想と、生彩に富む表現と、鋭敏な觀察眼とはルソーをして天才たらしめる十分な条件でなければならぬ。

記述し分類することに伴ふ困難はルソーの天才と相俟つて我々にとつて愈々超え難い障礙となる。就中此の特異の天才の面目躍如たる若干の個所に於ては此の操作は殆んど絶望的である。蓋し一般に天才の思想は平凡な分析を超越する。況んや瞬時も止住することのない漂泊の魂をその本質とした天才兒の思想は宛もダナオスの器を以ては遂に汲み上げることの出来ない水にも似て我々の手製の綱目には決してかかつて来ない。それでは此の捕え難いルソーの思想の、しかもその根底に横はる自然概念を我々は果して如何にして知ろうというのであらうか。

我々は先にルソーが独自の思索家であることを認めた。而してルソーが独自の思索家であることが認められる限りは、彼の自然概念も亦当然その思索の結果としてルソー自身によつて産出されたものでなければならぬ。此れが我々の方法上の出発点である。ルソー自身の思索の跡を追つて、そこから如何なる自然概念が生れ出るか、それを試みるのが我々の目的である。しかし此の際考察の範圍をエミールに限りたいと思う。当面の試みに対してはそれで一応十分と考えられるからである。

ルソーがエミールに於て完全に成し遂げ得たと考えたもの、又我々が彼に対して最大の功績を歸し得るもの、それは彼の人間そのものに対する革命的な觀察である。「人間はその本来からすれば帝王でも貴族でも、廷臣でも、富豪でもない。凡ての人間は裸体で貧しく産れる。何れも人生の不幸、悲哀、害惡、必要、凡ゆる種類の苦惱を脱れない。最

後に必ず何人も死ぬべき運命を担っている。これこそ人間というものの眞に意味するものである。……それ故第一に人間の本性に就ては、その最も切り離し難いもの、眞に人間なるものを形成しているものを研究することにしよう。」此の人間性の研究がエミールの基礎をなしていることは明かであるが更にルソーは言う。「(人間を)どうしなければならぬということに就ては私の觀察は非常に間違っているかも知れない。けれどもどうかしなければならぬものが何物であるかに就ては私は觀察を誤らなかつたと信じている。」と。而してエミールに於けるルソーの一切の思想は、もとよりその思想の根幹を成す自然概念をも含めて、専ら此の、ルソーに独自の、「他人の眼」や「他人の意見によつて与えられない」、しかもそのために彼が「長い間人々に批難されて来た」原因でもある人間觀察の結果として生じ来つたものでなければならぬ。それではその人間觀察とは一体何か、エミール一卷がルソーの人間觀察の結果であるとすれば、それを貫く自然概念の理解はルソーの人間觀察の経過を辿ることによつて得られる筈である。

(2)

エミール第四卷の大部分を占める「サヴォア司祭の信仰告白」(profession de foi du vicaire savoyard)はルソーが独自の立場より人間觀察に出発し、やがて神の存在を確信するに至つた興味ある過程を物語っている。觀察を通じて彼が発見した最初のものは、彼にとつて最も端的に自覺された存在の事実、就中自己の感覺的存在の事実であつた。彼は自己が感覺するという明晰な自覺から自己の存在と感覺の對象の實在とを認め、自己及び對象としての物質の實在とその調和とから神の存在を結論したのである。私は感覺する。故に私は存在する。私は感覺する。故にその

対象たる物質が存在する。又此の兩者に就て、一定の調和的關係に於て、一方には私をして意志せしめ一方には物質をして運動せしめる一つの意志がある。しかも此の万物をして秩序あらしめる一つの意志は必然的に靈的實在でなければならぬ。これがルソーの神であつた。

此の点を更にルソーに従つて幾らか詳細に見てみよう。

ルソーは当時、正に踏みしめる足元から一切の權威が崩れ行くデカルト的な疑惑の時機にあつた。併し疑惑は既に新生を予想する。「人間はいはば二度生れる。一度は生存せんが爲に生れ、再びは生活せんがために生れる」とルソーは言うが、その再生えの頼りとして彼が無に等しい懷疑の灰壙中から僅かに拾い上げることの出来たものは、「真理えの愛のみを自分の哲学として記憶する」という一事であつた。懷疑の嵐の中に唯一つ崩れ残つた此の根源的自覺を支えとしてルソーの再生と人間性えの探究が始められる。先ずそこから彼は三つの方法上の制約を求めることが出来た。それは、第一に直接自己に關係する事柄に研究を限定すること。第二に総て爾余の事柄は知らないままに満足すること、及び、知る必要のある事柄以外は疑うだけの面倒もしないということであつた。

然るに、彼が生涯の間に抱いて來た種々の意見を反省して知り得たことは、多くの觀念の中、最初の、且最も一般的な觀念は、同時に最も明晰で合理的であること、又此れを最後のものとするによつて我々は万人の眞理に至るであらうということであつた。

そこで取敢えずその最初の觀念を確立するために、彼は自己自身に關係する知識の研究を始めた。自分の確信を正直に省て尙且否定することの出来ない事柄は総てこれを自明の理として承認し、又此れに直接従うと思われる事柄は眞理として認めざるを得ない。かくして此處に得られた否定し得ない眞理、それは「私が存在している」という事

実、しかも「私は感覚を持ちそれを通じて触発される」という自覚と共に知られる單純な事實である。此れがルソーの探究に於ける第一の眞理であつた。此処から直ちに第二の眞理として私に對立する實體が導かれる。

私の感覚は私の中に生ずる。蓋しそれは私自身の存在を私に知らせるからである。しかし触発の原因は私の外部に存在する。何故なら感覚は、私が理由を持つと否とに拘らず私から獨立して發生し且消滅するからである。そこで私は私の中にある感覚とその原因たる対象とは異つた事柄であることを明瞭に認める。而して私は此の対象を物質と稱する。物質は私という第一の實體に對して得られたいはば第二の實體である。

次に問題となるのは此の二つの實體相互の關係である。明かに私は対象によつて触発される。此れは既に認めた通りである。しかも尙私は私自身に就て対象によつて触発されるのみならず対象を比較する精神の能動的能力の存在をも認めざるを得ない。比較することは判断することを意味する。従つてそれは触発されることとは全く逆の能力である。もとより触発されることがなければ判断することもあり得ないが、しかも尙それは受動的な感覚とは別個に私に属する能動的能力である。従つて自己は此の受動と能動或いは感覚と精神との二原理よりなる實體である。

それでは感覺的自己に物質が対応しているように精神的自己には何が対応しているか、それがルソーの神である。物質は時として運動し時として靜止している。従つて運動も靜止も物質にとつて本質的なものではない。運動は作用である。従つてそれは一つの原因の結果であつて靜止はその原因を欠いているに過ぎないと考えられる。原因がない場合には物質は運動しない。従つて物質の自然的状態は靜止の状態である。

一般に運動には二種ある。受動的運動と自發的運動とである。第一の場合は原因は外にあり第二の場合は原因が内部にある。而して前者は物質に属し、後者は生物に属する。併しその運動の原因は内と外とを問はず一つの意志でな

ければならない。此處から第一の信条として宇宙を運動せしめ、自然に生命を与える一つの意志の存在が得られる。運動している物質が一つの意志の存在を示すとすれば、一定の諸法則に従つて運動している物理的宇宙は一つの靈的実体の存在を指し示す。此れが信条の第二である。蓋し行爲し、比較し、選択して、調和あらしめることは理性的な働きを意味するからである。

かくして得られた二つの信条は直ちにルソーを神という第三の実体の發見に導く。第一の信条は意志する実体の存在であり、それが又理性的でもあることの確信が第二の信条であつた。而して今や此の二つの信条が綜合される時、意志し且その意志を理性的に遂行する実体、自己の力を通じて宇宙を運動せしめ万物を調和せしめる實在が考えられる。それが神である。従つて此の神は、回転する天体、草を喰む羊、風に散る木の葉の中に見え、一般に自然そのものの中にも人間そのものの中にも見える。「全体は一つであり、唯一の叡智を示現している。」而して此の叡智が實在する神の所在を指さしているのである。

一般に存在の証明を要するものは、思惟された神でもなく感じられた神でもない。それは人格的な實在する神である。而してルソーがその存在の確証を求めた神もやはりそのような神であつた。それは「宇宙をして運動せしめ、自然に生命を賦与する」人格的實在としての神でなければならなかつたのである。しかし此の点ルソーは不徹底であつた。現實に得らるべきルソーの神は感覺を手懸りとし、感覺的自然を媒介として、自然の中に叡智として導き出される限りでは未だ必ずしも人格的實在では、あり得ない。むしろそれは率直に自然と呼ぶべきであらう。

會てデカルトも亦方法敘説に於て神の存在の証明を試みたことがある。併しその証明は出発点に於てルソーのそれ

とは全く異つていた。デカルトは自己が「思惟する」という事実の疑うべからざる所から出發して自己の存在と物質の存在とを認め、そこからやがて神の存在を導いたのである。

デカルトの出發点は思惟であつた。併し思惟によつて導かれる神は所詮思惟的な性格を免れない。いはばあくまでも思惟の所産たる形而上学的な神である。しかし却つてそれだけに、それは自然と人間とに超越する人格的實在たることが出来る。もとよりデカルトにあつても思惟そのものから直ちに神は出て来ない。しかもなお思惟と物質とを結ぶ第三の實體として神を考えた所にデカルトの問題があつたのであるが、一旦そこに思惟の形而上学的飛躍を許せば二つの實體を結ぶ機械的な神として人格的實在が得られる。それがデカルトの神であつた。

然るにルソーの出發点は思惟ではなくて感覺であつた。感覺から出發して自然の秩序を見出すことは極めて容易である。しかしその秩序の中に信條を通して神を見出すことは感覺の飛躍なしにはあり得ない。しかるに感覺は思惟と異つて飛躍を許すべきでない。思惟の対象は無限であるが感覺の対象は自然を超えることが出来ないからである。

感覺された自然の印象から、一步を進めて人格的實在としての神に至るには、神と自然との断絶を信仰によつて飛躍しなければならない。此の飛躍によつて得られたのが、ルソーの神である。ルソーが出發点に忠実である限り、つまり出發点たる感覺の立場から飛躍しない限り、ルソーの神は依然として自然の中に止つていなければならない。事実ルソーにあつては神は自然の外にはあり得なかつたのである。創造主としての神の觀念はルソーを「当惑させずには置かなかつた。」しかし「それに就て考へ得られる限り」彼は「それを信じた」のである。

ルソーの発見した神が事實に於ては自然であり、信仰に於ては神であつたという此の特殊な事情が、彼をして独特な自然概念に到達せしめた。それが即ち「善なる自然」という概念である。

ルソーの神が事實は自然に外ならなかつたこと、及びその自然が敢て神として考えられたこと——此の二つの事情が結合した時にルソーをして人間の本性を善として規定せしめるに至つた。神が単なる超越的な實在であれば人間の本性は必ずしも善である必要はない。神はもとより善であるが人の子はむしろ十字架を背負つて原罪の巷によるめでいても良い筈である。又、神がなく、唯自然のみがある場合にも人間の本性は必ずしも善として規定され得ない。自然それ自体は本来価値の規準を超越してあるからである。

唯自然が神と一致する場合にのみ善なる神は善なる自然の中に示現する。而してその時始めて人間の本性が自然に従つて善であり得るのである。

従つて、ルソーにとつて人間の本性は善なる自然に従つて善であつた。エミール冒頭の有名な一節はルソーの此の信仰の端的な表現である。「造物主の手が出る時は総てのものが善である。何故なら「全能の神のあらゆる属性の中で善は最も本質的なものであり、善を離れて神は考えられない」からである。しかもその神の叡智が自然に於て現るべきものであればどうして人間本性の自然が悪であり得よう。

ルソーの人間觀察の試みが最後に到達したものは「自然人」の理想であつた。これが人間の自然を善と考える所より生ずる当然の帰結であることは既に明かであろう。生とは人間が善なる神の下に自己の中なる善なる自然を實現し行く一つの道程である。「自然人」とはいはば此の道程の地平線に浮び上つた人間の理想像であつたと言ふことが出来るであろう。

自己自身の存在に向つて投げた第一の問から、やがて神の発見を媒介として善なる自然人の理想に至る以上の過程は、又そのままルソーの自然概念の構造を物語っている。此の過程を辿ることによつて知られることは、ルソーの自

然が何であつたかよりもむしろそれが如何にして生れたかということである。性質ではなくして構造なのである。而してその構造に関して就中興味あることは、ルソーの自然概念がその發生の途上、原始的な體驗としての感覺的自然と、人格的な神の善なる屬性との間の微妙な緊張によつて、善なる自然という一種の信仰的な概念となつていたという事實である。

(3)

エミールを中心とするルソーの思想が教育に対して古典的意義を有することは言うまでもない。又そのルソーの思想の^{アルファ} α であり^{オメガ} ω であるものが自然概念であるというシュトロープの言葉にも全く同感である。少くとも教育に関する限り、人々は絶えずルソーの自然を問題とし、ルソーの自然に還ることを主張する。併し皮肉なことに、教育上の困乱の大部分は、実はルソーの自然を忘却することよりもむしろそこに還ることによつて新しく掻き立てられることが多い。これは偏に、ルソーの自然概念があまりに複雑であつて、独断的な解釈を無数に許容し、統一的な理解が不可能ならしめるという事情に基いている。而して人々はともすれば「自然に還つて」四つ這いで歩いて見たくなつたり、「自由放任」が教育の本領であると考えたりするのである。事実ルソーの自然は或る瞬間には野性を意味し又時には、「放任」をも意味する。併し又他の瞬間には高度の文化を包攝し嚴肅な規律と鍛鍊を要求する特殊な概念ともなる。或時は心理学的であり、或時は自然史的であり、又時には倫理的であり、更に往々神学的ですらある。試みに今ルソーの自然概念を此等幾つかの項に分類し得たとしても尙殘される無数の中間的な概念はどう扱うべきである

うか。例えばヘフディングが指摘するように、心理学的意味に自然史の意味が交錯し、自然史の意味に神学的意味が加つたりする場合、此れに対して再び無数の中間項を設けるとしても恐らくその煩に堪えないであろうし、統一的な意味の把握は望むべくもない。ルソーの自然は依然として謎であり論議は徒らに循環する。而して統一的な把握のない所に徒らにルソーが問題とされ自然えの復帰が唱えられるのは極めて笑止である。謎え帰ることによつて教育のジレンマは益々複雑化するに過ぎない。

一般に教育に関して自然が問題となるのは、単にそれが主張すべきだからではなくして、当然主張すべき自然に就て教育に対するその意義と限界とを知らなければならぬからである。ルソーに就ても同様である。重要なのは単にルソーの自然を偶像化してその適当な述語を探すことではなく、むしろその自然概念が教育に関して持ち得る意義とその限界とを学的に認識し得ることではない。

従つて此処に問題がある。学的に認識するというのは、ルソーの自然概念を予め準備された概念の項の中に整理して並べることであるのか。併し我々は残念乍らそのような分類趣味は養つていない。それともその自然概念を啓蒙思潮や自然主義の流れの中に美事に位置すけて見ることが学的なのか。併し我々には、問題をそのような速くに於て観照する余裕は幸か不幸か未だ無い。それでは学的な認識とは、ルソーが要するに謎の人であり、その自然概念が天才の魔術に等しいことを詠嘆的に主張することなのか、併し幸いにも我々は、そのようなペダントリイの習慣も持合していない、唯一つ確実に言い得るのは、我々の学的認識えの要求が、自己自身の教育の爲の切なる要求としてあるという事実である。従つて問題は、概念の分類的知識でもなく、歴史的な系譜の詮索でもなく、況んや天才的な複雑性えの感傷でもない。むしろ、そのように分類され得るルソーの自然概念が、そのような歴史的系譜の中にあつて、そ

のような天才的複雑性を持つに至つたその理由は何か、いはば思索する魂の理が問題なのである。

教育はもとより現実の行爲である。従つて教育学はその行爲的現実に就ての学であると同時に又その現実の行爲、えの学でもなければならぬ。つまり教育学の認識は教育的現実えの主體的反省を以て始り、現実えの決断を可能ならしめる普遍的知識として成立しなければならないのである。既に主體的反省を失つた單なる現実の觀察を我々は教育学とは呼ばないし、又現実的行爲への力となり得ない蒼白な知識の集積をも、我々は教育学として認めることは出来ない。而してそれは宛も集積された知識の素材である諸種の教育的主張が決してそのまま教育の学であり得なかつたのと全く同様である。

未だ学たり得ない教育上の主張を捕えて、その概念の意義と限界とを探る試みは、教育学えの一つの準備を意味する。蓋しそれらの主張に対する現実的態度の決定はその意義と限界との知識によつてのみ可能だからである。しかし意義と限界との知識が単に出来上つた概念の分類的な、或いは歴史的な、或いは印象的な、性質の理解によつて得られないことは既に明らかである。我々は先ずその概念を産出した同じ思索の出発点に立帰り、その概念を作り行く魂の理由を思索の過程に於て知らなければならない。教育学を作るものは、教育的諸概念の性質の知識ではなくして、むしろその構造の知識なのである。

前節に於ける我々の試みはほぼ以上の自覺に基いている。しかし自然概念の構造の知識は思索の過程を辿るだけでは不充分である。それはいはばまだ抽象的構造に過ぎない。我々は更にその具体的な構造を、ルソーの感性論、悟性論、習慣論、道德論等として知ることが必要である。而して我々が自然概念の構造自体を取上げて教育学の問題とすることが出来るのは、更に又その後のことでなければならない。